vol.27

老齢動物の病気について

前号では、よく遭遇するステージB2と症状の軽いステージCの治療についてお話ししました。ステージCになり症状、特に咳や呼吸状態が悪い場合は、肺水腫の発症が考えられます。これまでの代表的な薬であるピモベンダン（強心剤）、ベナゼプリル（ACE阻害薬：抗アルドステロン作用のある薬）の他に、さらに**利尿薬**を使っていくことになります。**肺水腫の治療**はこの「**利尿薬**」と「**身体に入る水分・塩分**」**のバランス**がキーポイントであると言っても過言ではありません。

利尿薬を使うとオシッコを我慢できず粗相したりトイレに行くのが間に合わないこともあったり、飼い主さんにとっては悩ましいことであると思います。しかし、肺水腫の治療にはループ系の**強力な利尿薬**が必要です。肺水腫が落ち着いてきたら、利尿作用は弱いが抗アルドステロン作用のある**スピロノラクトン**などを使い再発を防ぎます。

利尿薬は身体の中からオシッコに**水分**を出します。しかし医学的には一緒に**塩分（Na）**を出すことに意義があります。身体の中で**塩分（Na）**は、浸透圧の関係で**水**とくっついて存在するので、オシッコとして**塩分と水分**を出すことで、心臓が動かさなければならない**循環血液量を減らす**ことになり、**心臓は楽に動ける**ようになり、また肺の間質に渋滞してたまっている水分を出して**肺水腫を治療**します。

利尿薬は水と一緒に塩分を出します。摂取する塩分

② 犬の僧帽弁閉鎖不全症（MR）

7.MRと診断された時、飼い主は何をすべきか?
～MRの治療について（その2 利尿薬について）～

文・写真 中西章男
text & photo by Akio Nakanishi

が少なければ、利尿薬の必要性は軽減されるので、食べ物として身体に入る塩分が少なければ、利尿薬も減らせ、肺水腫のリスクも軽減されます。**心臓病食**が**低塩**なのはココに理由があります。

肺水腫が重度の場合には、入院して**酸素室**に入り、点滴で身体に入る**水分**と**塩分**（電解質）を調整しながら、**強心**と**利尿**を考え様々な投薬を試みます。この時、投薬は即効性と調整のしやすさから静脈内に点滴ルートから入れることが多いです。特に**腎臓が悪い**場合は**利尿**をかけ過ぎると循環血液量が減り**尿を作れなくなる**ので微妙なバランスが求められます。

今号では主に**利尿薬**について解説しました。**飼い主さんとして考えることは**、日頃から**ペットが摂取する塩分には注意**して、MRの疑いがあると分かった段階から、人の食べ物やおやつなど**過剰な塩分を与えない**ように心がけましょう。（次号に続く）

Profile

獣医師・獣医学博士。1959年生。1986年日本獣医畜産大学（現日本獣医生命科学大学）大学院博士課程卒。大学ではフィラリア症の血行動態、腫瘍および外科の免疫について研究。1987年東京都杉並区で「阿佐谷ペットクリニック」を開院。小動物の総合診療医として犬猫のみならずウサギ、小鳥、ハムスター、モルモットなど数々の動物を診療してきた。趣味：ゴルフ、モータースポーツ、機械いじり、動物たちとの戯れ。著書：『車イスに乗ったチロ』集英社